

## 和歌山県名匠

### つもと はる 津本晴の

#### 経歴及び業種

幼少の頃から、当時冬の農閑期に各家ごとに行っていた、保田紙の紙漉きを手伝い始め、17、8歳のころには一人前に漉けるようになった。以来、通算して40年余りにわたって従事してきた。

保田紙は、江戸時代初期に奈良吉野地方から、当時山保田ノ庄と呼ばれたこの地方に紙漉きの技術が伝わったと言われており、傘紙や煙蒸幕用の紙などに用いられ、特に海南の和傘用として出荷された。

しかし、昭和28年の大水害によって、紙漉きの道具が流されてしまい、さらに和傘の需要が減少したことなどにより、和紙作りは途絶えた。

その後、昭和54年2月、清水町高齢者生産活動センターの開設により、再び伝統の技法が復活し、全盛期に紙漉きの技術を体得した津本さんをはじめ三人で、保田紙の手漉きを行なっている。

保田紙の製法には、原料となる楮（し）の切りそろえに始まって、各種の工程があるが、中でも簀子（すいこ）で紙を漉く際に、一定の厚さに漉き上げるためには、微妙な技術が必要となる。

現在、同センターで製作された和紙は、便せん、封筒、はがき、名刺、その他民芸品などに使用されている。



職 種 保田紙手漉